

氏名（本籍）	松浦 佑希		
学位の種類	博士（健康スポーツ科学）		
学位記番号	博甲第	9907	号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	学習者の多様な感覚経験に基づく運動指導方略の 開発と効果検証		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	坂入 洋右
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	澤江 幸則
副査	筑波大学助教	博士（人間・環境学）	國部 雅大
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	木内 敦詞

論文の内容の要旨

松浦佑希氏の博士学位論文は、実践者が楽しく主体的に取り組むことが可能な運動指導方略を開発し、その心理的効果と技能向上効果及び対人的効果を検証したものである。その要旨は以下のとおりである。

本論文において著者は、まず近年の社会的問題の背景からこれからの学校体育に求められる指導の方向性を検討し、目的とする能力を高める活動を通して、21世紀型能力において求められる、「活動への主体性」、「変化への適応」、「他者とのコミュニケーション」という3つの資質能力を身に付け、「主体的・対話的で深い学び」の実現を可能とする指導方略が必要であることを指摘した。その問題意識に基づき、特に「深い学び」に着目し、学習者自身の経験によって意図や概念を理解すること（深い学習）を可能にする指導方略を開発することと、その有効性の検討を行うことを目的に、段階的に研究が実施された。

本論文では、学習者の主体的な取り組みを重視し、学習者一人ひとりに合った運動技能を効果的にボトムアップで身に付けさせることを可能にするため、グローバルダイナミクスアプローチを応用した「感覚経験型指導法」が考案され、その有効性が多面的に検討された。ボトムアップ的（潜在的）に学習を行う、この「感覚経験型指導法」の効果を確認するために、同様の内容をトップダウン的（顕在的）に指導し学習させる「モデル習得型指導法」が設定され、Gボール上で行うバランス課題を用いてそれぞれの心理的効果・運動技能向上効果・対人的効果を比較するため、3つの課題を設定して7段階の研究が遂行されている。

研究課題1で著者は、指導方略が学習者にもたらす内的な変化のプロセスに関して、Trajectory Equifinality Modelを用いて質的な分析を行い仮説モデルを作成した。さらに、運動技能向上効果について、モーションキャプチャを用いた動作解析を通して、それぞれの指導方略の効果の特徴（感覚経験型指導法では課題に対するロバスト性（バランスの復元力）が高まること）を確認している。

研究課題 2 では、2 段階の研究が行われている。研究課題 2-1 では、感覚経験型指導法の心理的効果（学習者の気分の快適度、学習に対する内発的動機づけ、没頭度（フロー））が高まることが確認された。研究課題 2-2 では、大学体育授業において検討が進められ、楽しさと積極性が高まること、運動技能向上効果としてパフォーマンスの向上（バランス保持時間・バランスの復元力の向上）が確認された。一方、モデル習得型指導法では、長い時間バランスを保持し続けられなかったものの、理想的なフォームと技術を用いてバランスを保持することを可能にすることが確認されている。

研究課題 3 においては、心理的効果と運動技能向上効果に加えて対人的効果を検討するため、ペアで行うバランス課題を設定して、4 段階の研究が行われている。研究課題 3-1 では、研究課題 3-2～4 で用いるペア運動課題として、間接的に接触を行うペア運動の楽しさと対人関係の向上効果が確認された。この課題を用いて、研究課題 3-2 では、ウォーミングアップを目的とした短時間の運動における感覚経験型指導法の効果を検討し、その結果、運動に対する満足感に加え、対人関係の向上を促進することが確認された。研究課題 3-3 では、大学体育授業において、対人的効果に加え、心理的効果および運動技能向上効果の検討が行われ、感覚経験型指導法が他者とのコミュニケーションを促進し対人関係を高めること、および個人運動課題よりも外乱が増加したペア運動課題においても、より効果的に運動技能を向上させることが確認された。研究課題 3-4 では、実践現場への応用として、中学校体育授業において研究が実施され、研究課題 3-3（大学体育授業）と同様の効果が確認された。

本論文の著者によって、学習者の多様で主体的な運動体験を促進する「感覚経験型指導法」が開発され、そのボトムアップ型の指導方略が、従来のトップダウン型の指導方略と比べて、より楽しく効果的な運動技能の習得を可能にすることが確認されたことが、本研究の成果と言える。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文において開発された感覚経験型指導法は、学習者の運動技能の向上と学習者が他者とコミュニケーションを多く取りながら、より楽しく主体的に活動に取り組むことの両立が可能な指導方略であることが確認された。これを教育現場において活用することによって、新学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」が促進されることが期待できる。7 段階の実証的な研究を通して、その有効性に関するエビデンスが提示されており、学術的にも実践的にも意義のある論文として高く評価できる。

令和 3 年 1 月 28 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（健康スポーツ科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。